

## Aaron's Rod 論\*

—“singleness” について—

山 田 晶 子

### 序

1921年に完成され1922年に出版された D. H. Lawrence (1855-1930) の *Aaron's Rod* は、これまで研究者や批評家の間に様々な問題を提起してきた。この小説の欠点の一つとして、なぜ Aaron が妻子を残して突然家出をしなければならないのか理由が分からないし、小説の末尾で彼が一人っきりになってしまうがそのことにどんな意味があるのかが分からない、またフォームが欠落しているし話が非現実的である等、芸術作品としての欠陥を指摘されてきた。

Lawrence 自身は、1921年10月8日の Selzer 宛の手紙の中でこの小説のテーマは *The Rainbow*, *Women in Love* のテーマにつながるものであると述べている。

It is the last of my serious English novels—the end of *the Rainbow*, *Women in Love*—It had to be written—and had to come to such an end.<sup>1)</sup>

なるほどこの小説には形式上の問題点はある。しかしそのテーマは作者

の述べている通り重要なものであると思われる。

*Women in Love* において Birkin によって唱えられた「星の均衡」, 「人間の真の生には言葉が不必要であり, 象徴的な意味での死が必要であること」及び “singleness” (「単一性」) の思想<sup>2)</sup> は, *Aaron's Rod* においてはいっそうつきつめて考えられておりこの小説は Lawrence の思想の発展を知る上で非常に重要である。

“What I want is a strange conjunction with you—” he said quietly: “—not meeting and mingling; —you are quite right: but an equilibrium, a pure balance of two single beings: —as the stars balance each other.”<sup>2)</sup>

*Women in Love* の世界と同じく *Aaron's Rod* の世界でも人々は機械文明の中で自意識に苦しめられ spontaneity を喪失している。Lawrence の spontaneity を取り戻したいという思いが Aaron の家出により具体的に, そして彼を導く Lilly の理論づけにより小説化されている。“singleness” とは人間ができるだけ spontaneous な存在に帰るために必要な状態であり, Lawrence はその single なものを人間の真の自己として捉えている。真の自己は, 彼の小説においてはたびたび “demon” あるいは “devil” 及びそれと同質のたとえ方をされているが, *Aaron's Rod* においてはそれが特に著しい。“demon” 等はキリスト教の敵であるので, Lawrence は特に *Aaron's Rod* において人間を demoniac なものにたとえることにより, 彼が当時生きていたキリスト教社会の批判を行っているものと思われる。

demon 等以外にもフルートを初めとして様々な象徴が関連し合って, Aaron が “singleness” を達成するテーマのために機能しているが, この小説中で中心的象徴は Lawrence の異教世界志向を示しているように思われる。彼がこの小説でなぜ再び “singleness” を追求することになった

のか、またその特質は何なのかを、小説中の様々な象徴と関連させて考察してみようと思う。

## I. Lottie の愛

この小説の第二章“Royal Oak”における Aaron のクリスマスイブの突然の家出については、Aaron 自身もその理由が明確に分からないが、第九章の“Low-water Mark”においてインフルエンザにかかってひん死の状態に陥る Aaron が Lawdon Lilly によって超科学的な方法で救われた時から、言葉で理論づけはできないながらも Aaron は自分の家出の原因を悟り始める。Lilly が Lawrence の代弁者となり Aaron の心境を読者に説明する。Lilly は Aaron が新生するための導き手であるが、Aaron 自身も Lawrence の分身である。

Aaron の家出の原因は何であったのか。それは彼が spontaneity を喪失した状態に追い詰められていたのだが、僅かに残っていた彼の最後の spontaneous なものが彼を家庭から脱出させたということである。Aaron 自身、第十二章“Novara”において、Franks 卿夫妻の家で、人間が生まれたり死んだりするのが自然なように自分が家を出たのは自然にであったと述べている。

では、彼を家出に追い込んだその家庭とはどんなものであったのか。その家庭は、Aaron をしてそれを振り返れば「塩の柱」になると思わせる程悪徳に満ちたものとして旧約聖書中の「ソドムとゴモラ」にたとえられている。このたとえば Lawrence の当時のキリスト教社会に対する痛烈な批判が伺える一例である。Lilly は第二十章の“The Broken Rod”において次のようにキリスト教を批判している。

The ideal of love, the ideal that it is better to give than to receive,

the ideal of liberty, the ideal of brotherhood of man, the ideal of the sanctity of human life, the ideal of what we call goodness, charity, benevolence, public spiritedness, the ideal of sacrifice for a cause, the ideal of unity and unanimity—all the lot—all the whole beehive of ideals—has all the modern bee-disease, and gone putrid, stinking— . . . .<sup>3)</sup>

Aaron の妻の Lottie は、キリスト教の愛の思想を Aaron に強要するのである。Aaron が彼女に彼の全てを明け渡すことを強要する。Magna Mater としての負の側面を Lottie は露わにする。彼女の「愛が全て」というキリスト教の偽善性が、Aaron の次の言葉に表れている。

Even the infernal love and good-will of his life. To hell with good-will! It was more hateful than ill-will. Self-righteous bullying, like poison gas!<sup>4)</sup>

“infernal” は「地獄の」あるいは「悪魔のような」という意味で、「愛」は Aaron にとっては苦しみ以外の何ものでもないのだ。また妻の存在は “the female will so diabolical,<sup>5)</sup> “there was her terrible will, like a flat cold snake coiled round his soul and squeezing him to death.”<sup>6)</sup> と表現され、Lottie の「悪魔性」が強調されている。そして第四章の「塩の柱」で Aaron は妻の面前に姿を現したい衝動に駆られるが、そのことは「悪魔に誘惑されるように」と表現され「家」へ行くことが地獄へ行くことを意味している。一方で、Aaron に面会した Lottie も彼のことを “evil as you are at the bottom. You’re evil, that’s what it is—and weak.”<sup>7)</sup> と Aaron の「悪魔性」を強調する。「悪魔性」は Lawrence により肯定される面と否定される面の二面性を有している。

*The Princess* において娘 Dolly を王女と呼ぶ父親 Collin は玉ねぎの皮

をむくように人間の皮相な面（家柄、学歴、財産等）をどんどんはぎ取っていくと中心部に緑色の悪魔がいて他のことには全く無関心である。それが人間の real-self であると述べている<sup>8)</sup>が、この「緑色の悪魔」は Aaron や Lilly に託して Lawrence が求める“singleness”に該当すると思われる。Lilly は dark, little man で devil が存在すると述べられているように、新生を目指す Aaron や彼を導く Lilly の“demon”あるいは“devil”はキリスト教社会の偽善性を批判し新生を求めるもので Lawrence が肯定するものである。

一方で偽善社会を代表する一人の W. Franks 卿は「悪魔のような言い方」をすると「恐ろしい鉄のような悪魔」, 「鉄の機械に潜む悪霊」と表現され、Jim も Argyll も「悪魔のような顔」の男として表現され、テル・トーレ侯爵婦人も“like a demon”と表現されている。これらの人々は富にしがみつきの古い愛の観念に束縛されているので Lawrence によって否定されている人物である。Aaron は裕福な Franks 家に滞在しているが上品な小さいテーブルを窓の外に投げ出してしまう悪魔に似た感情に駆られる。*The Princess* の Collin は「悪魔には偉大なものと卑しいものがいる」<sup>9)</sup>と述べているが、Lawrence の“demon”という表現には creative, spontaneous な肯定的な意味と古いものにしがみついたり人間の偽善性を意味する否定的な側面との両面がある。

さてキリスト教社会の一単位としての Aaron の家庭は“A stark white incandescent light filled the room and made everything sharp and hard”<sup>10)</sup>と書かれ、*Women in Love* の雪の白色のように白い光が Lawrence 的否定的存在として登場している。Lottie はその家庭で“high imperative voice,”<sup>11)</sup> “insisted the voice,”<sup>12)</sup> “a woman’s plangent voice”<sup>13)</sup>等と表現されるような耳障りな声を上げる。ある批評家は Aaron's Rod には Lawrence の他の作品には見られない静けさがあると述べている<sup>14)</sup>が、家出をした Aaron のみにその言葉は当てはまり他の人々は騒々しい。そ

して Aaron がフルートを携えて放浪するように快美な音と不協和音あるいは雑音が対比されて小説の全篇に音が溢れており、音のイメージはこの小説において重要な機能を果たしている。

Aaron は上着を着る暇もなくクリスマスツリーのセッティングへとせき立てられる。彼は体に寒さを感じ家の中もすさまじい風が入って来て寒い。

人間が「悪」を内包する存在の例として、Aaron の二人の子供 Millicent と Marjori が示すクリスマスギフトへの物欲があげられる。また Millicent が美しい青い玉を壊れるかどうかを試してついにそれを壊してしまう。

“... a look, half of pure misery and dismay, half of satisfaction, on her pretty sharp face.”<sup>15)</sup>

ここで幼い子供の頃からすでに芽生える「悪」の心理状態を Lawrence は見事に描き出している。青い玉はもともと Aaron が所有していたものであったので、それが壊れることは皮肉にも「古い」Aaron が破壊されて新生するためのきっかけであると読める。その一つの具体的な表れがロイヤルオークで Aaron が楽しめないことである。

A cold, diabolical consciousness detached itself from his state of semi-intoxication.<sup>16)</sup>

Aaron はロイヤルオークへ行ったら、家庭の方向へ戻ろうとしたが、その方向には悪魔がいたと書かれている。Aaron の家庭は「悪の巣」なのだ。かくして Aaron は家庭へ戻ることは止めて放浪を始める。Aaron の家のクリスマスツリーにはろうそくが欠如しているため火が点らない。このように彼のクリスマスイブの家出はキリスト教で最も大切な儀式が侮

られていることである。Aaron を放浪へと駆り立てたものは彼の内部の "invisible black dog,"<sup>17)</sup> "a devilish little cold eye,"<sup>18)</sup> "selfish demon"<sup>19)</sup> である。この demon, devil 的要素が Aaron の真の自己なのである。

Aaron の新生へ向かっての放浪が始まり、彼が立ち寄ったシヨトルハウスでは生きている木にろうそくを点し、その時 Aaron が登場する。読者は Aaron が「神」として登場したかのごとく印象づけられる。この場面は後に Lilly が Aaron に「君は生命の木だ」と述べることの伏線になっている。シヨトルハウスの人々は言う。"We ought to do a ritual dance!"<sup>20)</sup> "We ought to worship the tree."<sup>21)</sup>

## II. Lilly と "singleness"

"singleness"——これは個人的なレベルでは女性の支配、主導権を離れ男性が自己を取り戻すことである。たとえば Jim Bricknell は常に「愛」に飢えていてそれがないと死ぬと言う。Lilly は彼を "it's nothing but love and self-sacrifice which makes you feel yourself losing life."<sup>22)</sup> と言って忠告を与えるが、二人は水と油のようになじまない。Jim も "looking like a Chinese dragon, diabolical"<sup>23)</sup> と表現されるが、彼は Aaron と違って新生に入らず、"singleness" を得ることのない否定的タイプの男である。

Aaron は Lilly と出会い、インフルエンザに罹っていたのを介抱されて救われるまでは「死体」のようである。彼の病気の直接の原因は Josephine という負の存在としての女性の誘惑に負けたためであるが、真実の原因は心の状態にあった。

Cold, with a white fury inside him, he floated wide-eyed and apart as a corpse.<sup>24)</sup>

"I'm nothing but a piece of carrion."<sup>25)</sup>

しかし、*The Escaped Cock* の「死んだ男」がイシスの女によって甦えるのと同じような方法で、Aaron が Lilly に肉体の傷を完全にいやされたようにその心も Lilly の感化によって甦っていく。Lilly の言葉は *The Escaped Cock* の「死んだ男」のそれに似ている。

"A man should remain himself, not try to spread himself over humanity."<sup>26)</sup>

Lilly はキリスト教で言われる「与え過ぎること」の恐ろしさを警告している。「死んだ男」は自分が肉体一個の領域のみということ破って人類に自己を与えようとしたためにひどい仕返しをされたのだと悟っている。Lilly は "Everybody ought to stand by themselves, in the first place—men and women as well."<sup>27)</sup> "But nothing is any good unless each one stands alone, intrinsically."<sup>28)</sup> と言って Aaron を教える。"we are, together and apart at the same time" という言葉は、*Women in Love* の Birkin の "freedom together" と同じ思想である。Lilly の言葉は Aaron の魂にある呼びかけをしたため Aaron は新生へと導かれていく。

So far, man had yielded the mastery to woman. Now he was fighting for it back again. Henceforce, life single, not life double.<sup>29)</sup>

Let there be clean and pure division first, perfected singleness. That is the only way to final, living unison: through sheer, finished singleness.<sup>30)</sup>

"singleness" は男の力の回復であり、強制されて行動するのではない

spontaneous な状態であり、男性ばかりではなく女性も必要とするものである。男性も女性も single になり得てこそ理想的な結合ができるのである。病気から回復してイタリアのノヴァラへ着いた Aaron は、ある境界線を越えたと思う。それは彼の新生への旅が一步進んだことを意味している。

次に“singleness”を社会的なレベルで考えるに当たり、再び Lilly の言葉引用しよう。

Damn all masses and groups, anyhow. All I want is to get myself out of their horrible heap: to get out of the swarm. The swarm to me is nightmare and nullity.<sup>31)</sup>

“singleness”を得ていない人間が集団に含まれると偽善的になり、機械の一部品のようになり、spontaneous な存在ではなくなる。その集団の最悪のものが戦争部隊である。Lilly は、敵を殺したいが“a unit in a vast obscene mechanism”<sup>32)</sup>にはなりたくないと言うし、戦争というものは“mob-sleep”<sup>33)</sup> “mass-psyche”<sup>34)</sup>であると言う。Women in Love においても、否定的存在の Gerald は機械の神のようになり、炭鉱夫は機械の部品のようになる。また The Rainbow では Ursula の恋人であった Skrebensky は戦争に自分を捧げることに生きがいを見出すタイプの男だったので Ursula に捨てられることになる。集団に入っていて安心感を覚える人々は、W. Franks 卿夫妻のように金に依存しており、この点においても Lawrence は彼等を批判している。Aaron はフルートが壊れるまでは半ばは金に惹かれ半ばは反発している。Aaron を導く Lilly も Tanny とうまくいつている訳ではなくて悩んでいるように、個人的レベルでもまた社会的レベルでも、“singleness”を成就するに当たっての Lawrence 自身の迷いが伺われる。

Aaron は「死ぬ」ことのできた人間であった。The Lost Girl で Alvina

が Ciccio に「死」の体験をさせられたように。また「死んだ男」のように。それは古い自己を、古い価値観を捨てることを意味しているのだ。

### Ⅲ. 様々な象徴と “singleness”

Aaron が singleness を確立し新生を果たすというテーマを明確にするために様々な象徴が用いられ、それらは互いに有機的な関連を持っている。そしてこれらの象徴は、作者がキリスト教を批判する結果として異教的要素を持っている。

#### (1) mask

「マスクは偽りの自己である」と第十三章に書かれているように、“mask” は真の自我を覆い隠すものの象徴であり、Aaron は “mask” をこなごなに壊すことによって “invisible” になる。Aaron が蘇生するのに対して Franks 夫妻やその取り巻き達は内面が死にかかっている。Aaron 以外のイギリス人やイタリア人は「真の自己」を知ること、それに直面することを恐れ、紐で中身が見えないようにしっかりと包まれた紙包みのように自意識に満ちている。spontaneous の反対の状態にいる。

#### (2) はじけた栗の実

栗のイガが偽りの自我であり中の実が真の自己である。Aaron は、*“tumbled from the tree of modern knowledge and cracked and rolled out from the shell of the preconceived idea of himself like some dark, night-lustrous chestnut from the green ostensibility of the burr, he lay as it were exposed but invisible on the floor . . .”*<sup>35)</sup>と書かれている。これは、*The Rainbow* の中で Ursula がさやから出たドンダリの核のように真の自己に目覚めるという表現と同じである。「栗の実」は「夜のように黒く輝く。」

Lilly の目にも他人の目にも Aaron は「白い人」(“fair”) であるが中身が「黒い」。これはロレンスの「血と肉」の存在を意味し、男性的官能性の黒さである。彼の悟りは “not word-ideas”<sup>36)</sup> であり「パンの神」を連想させる。 *Women in Love* においても Birkin は Ursula との愛において互いを理解する上で言葉は必要でないと言っている。

Aaron は “mask” が取れ「栗の実」としてはじき出ると次に示されているようにキリスト教的愛の思想の偽りを悟る。

The last extreme of self-abandon in love was for him an act of false behaviour.<sup>37)</sup>

Now he realized that love, even in its intensest, was only an attribute of the human soul; one of its incomprehensible gestures. And to fling down the whole soul in one gesture of finality in love was as much a criminal suicide as to jump off a church-tower or a mountainpeak.<sup>38)</sup>

Aaron が悟る真の自己は Lawrence が *The Rainbow* で描きたいと述べた “another ego” であり、ここに Ursula と Aaron の共通点が見られる。かくして彼は新生を始める。

So Aaron, crossing a certain borderline and finding himself alone completely, accepted his loneliness or single-ness as a fulfilment, a state of fulfilment.<sup>39)</sup>

ここで分かるのは真の自己=singleness=dark, black であり, spontaneous であり, それはまた “demon” と呼ばれているということである。

### (3) eagles

W. Whitman の詩 “Dalliance of Eagles” を借用して Lawrence は男女の愛の均衡を述べる。Women in Love の「星の均衡」と同じ思想である。

Two eagles in mid-air, grappling, whirling, coming to their intensification of love-oneness there in mid-air. In mid-air the love consummation. But all the time each lifted on its own wings: each bearing itself up on its own wings at every moment of the mid-air love consummation. That is the splendid love-way.<sup>40)</sup>

この鷲が Jupiter を意味するというはこの引用だけからでは引き出せないが、Aaron's Rod という小説全体に溢れる異教的シンボリズムと関わらせると鷲は Jupiter の意味を内包していると思われる。第十八章で、Aaron のフルートのおかげで Nan が歌を歌えるようになり Aaron は男としての欲望を “Jove's thunderbold,”<sup>41)</sup> “the powerful male passion”<sup>42)</sup> と感じ、その膝は「異教神の膝のよう」であったと書かれていることから明らかである。

### (4) 虎

虎に属する象徴は肯定的な意味と否定的な意味の両方を持っている。軍人であって Aaron への態度が横柄な Robert はライオンとか大きな猫にたとえられているが、これは古い世界に属する人間を指していて否定的な意味を持つ。Franks 家の暖炉で燃える丸太は Aaron には豹やライオンに映じるが、この場合も金や偽りの名声に凝り固まった古い世界の人間を示す否定的な象徴である。

一方 Aaron がノヴァラで Franks 家の窓から眺めるアルプスの山並みも “marvellous striped skypanthers”<sup>43)</sup> と表現されるが、この場合は

Aaron が Lilly により啓示を受けた後で、彼はその山並みから "... felt himself changing inside his skin."<sup>44)</sup> と思うように、「男性の力」の象徴となっている。

次の章 "Wie es Ihnen Gefällt" においては同じアルプス山脈は "the tiger-like Alps"<sup>45)</sup> と表現されている。 *Twilight in Italy* で、Lawrence は「虎」は、精神を「血と肉」の世界に仕えさせるものの象徴と述べている。Aaron がノヴァラで感じる「虎」のイメージもこのような男の力を秘めている。

... the magnificent snow domes of the Wild Alps ...<sup>46)</sup>

... These magnificent fierce-gleaming mountains ...<sup>47)</sup>

#### (5) ユリ

*Aaron's Rod* では Aaron が訪れたフローレンスという都市はユリの花に象徴され、Aaron にとってこの都市は「男の町」であると感じられる。このユリは白いユリではなく赤いユリであり、棘のある、また虎の縞模様のある tiger-lily である。白いユリはフローレンスの紋章で、画家エル・グレコの『受胎告知』の聖母マリアと共に描かれているように聖母マリアの象徴であるが、赤いユリは「血」、「生命」の色であり、Lily という響きは Lawdon Lilly の「リリー」と関係している。「男の町」フローレンスには "devil" がいると Argyle は述べる。

"The devil looking over Lincoln," said Lilly laughing, glancing up into Argyle's face.

"The devil looking over Florence would feel sad," said Argyle.

"The place is fast growing respectable—Oh, piety makes the devil chuckle. But respectability, my boy, argues a serious diminution of

spunk.”<sup>48)</sup>

“respectability”は「世間体ばかり気にすること」、「因襲道徳にこだわること」という意味で、Aaron がノヴァラを見た時、イタリアの無意識的な生き方もだんだん機械に占領され、多様性が画一性にとって代わられつつあると嘆くように、フローレンスの「男性性」がだんだん減じていくことをLawrence がArglyeの口を借りて述べているのである。

#### (6) フルートと蛇

*Aaron's Rod*において最も重要な象徴は、Aaron が携えて放浪するフルートである。この小説に溢れているのは「音」のイメージリである。「この小説の最も深い所には静寂があり、Lawrenceの他の作品には見られない静けさがある」<sup>49)</sup>という意見はAaronとLillyの心境には当てはまるが、二人を取り囲む社会は実に騒々しい。

第一章ではAaronの家庭はLottieの“high imperative voice,” “a woman's plangent voice”等と表現されるような耳障りな音を立て、青い玉が砕ける音がする。Aaronの家の外では“The hollow dark countryside re-echoed like a shell with shouts and calls and excited voices”<sup>50)</sup>と騒々しく描写されている。この騒音の中でAaronのフルートの響きは“very limpid and delicate,”<sup>51)</sup> “the pure, mindless, exquisite motion and fluidity of the music”<sup>52)</sup>と表される。純粹で自意識がない甘美なフルートの響きは“singleness”の思想につながるものである。神秘的な響きである。

Aaronと違って新生ができない人々の社会はLillyにより“beehive”<sup>53)</sup>といかにもうるさいものとして表されている。その他第三章の“The Lighted Tree”におけるJimの神経症的な自意識に満ちた笑いの発作、第五章“At the Opera”における歌劇『アイーダ』の二流芸術の響き、ロンドンのLillyの下宿で病気になって寝ているAaronを苦しめる戸外の雑

音、フローレンスでの爆弾破裂音が騒々しい社会を表している。

Aaron のフルートについては、旧約聖書中の出エジプト記中で、Moses の兄の Aaron の杖が蛇に変身したと記されている。蛇は創世記で Adam と Eve を誘惑した Satan でもあり、Lawrence の詩 "Snake" では「追放された死者の国の王」と表現されているように、キリスト教にとっては敵である。Aaron のフルートはデル・トーレ侯爵夫人 Nan の歌を魅らせ、その音は「正に純粋な雄なるもの」でツグミの呼びかけの声と表現され、natural な特質を表す。それで Nan は白鳥のように歌う。*The Escaped Cock* ではイシスの女と結ばれる「死んだ男」は最終節で木にたとえられ、その核に「金色の蛇」がいると書かれ、蛇は肯定的な男性の力の象徴となっている。

Aaron は音楽に携わる時は悪魔的な気持ちになると言っている。だからフルートと蛇と悪魔は「男性の力」を示すものとして同じ意味を持っている。フルートの音は *The Ladybird* の Dionys 伯爵の歌声や *The Fox* のきつねの匂いのように非理性的なものであり、人間の無意識に働きかける力を持っている。

しかし、Aaron と Nan の性的関係が失敗に終わったのは Lilly の言う「男も女もまず single でなければいけない」という考えにおける女の側の singleness を Nan が達成しないまま Aaron と性交渉をしたためであろう。*The Escaped Cock* では、イシスの女も singleness を達成していたため「死んだ男」と理想的に交わることができたのである。

フルートは第二十章 "*The Broken Rod*" においてアナーキストの投げた爆弾のため壊される。これは Aaron を古い社会と結びつけていた bondage が全て決定的に壊れたことを示している。Lilly は Aaron を慰めて「また生えるよ。葦だし水草だからね。枯らすことはできない」と言う。「葦」はパン神の笛を連想させる。また Lilly は Aaron に「君は生命の木だ」とも言うが、「生命の木」は古代の多くの異教世界において信仰されたも

のであり、Lawrence のエッセイ「アメリカのパン」の中に出て来るパン神の化身としての松の木と結びつく。

第二十一章“Word”では Lilly は Aaron に「不死鳥になれ」と言う。

“You’ve got an innermost, integral unique self, and since it’s the only thing you have got or ever will have, don’t go trying to lose it. You’ve got to develop it, from the egg into the chicken, and from the chicken into the one-and-only phoenix, of which there can only be one at a time in the universe. There can only be one of you at a time in the universe—and one of me. So don’t forget it. Your own single oneness in your destiny. Your destiny comes from within, from your own self-form.”<sup>54)</sup>

Aaron がここまで達する以前に、彼は夢を見た。ボートに乗った“mask”としての Aaron こと真の自己である“invisible Aaron”が登場し、“mask”の“invisible Aaron”は三度腕を枕にぶつけるが、ついに腕を引っ込めて、invisible Aaron はホッとする。夢の中で最後に彼は異教のメキシコらしき所にやって来て異教の女神のアスタルテの膝に抱かれた卵——鶏の小さな卵数個と“one single little roll of bread”のような白鳥の大きな卵——を見る。アスタルテの膝の上の卵は、Lilly が述べているように“singleness”を達したばかりの不死鳥の卵としての Aaron を示すと思われる。不死鳥はエジプト神話の霊鳥であり、「不死」「永生」の象徴である。卵が不死鳥に成長すれば、Aaron が次に結ばれる女性はキリスト教的な女性ではなく、*The Escaped Cock* 中のイシスの女のような異教的な女性であろう。

#### Ⅳ. 結 び

Lilly は Aaron の内部から来るものを良しとするが、キリスト教では良いものは外から来るのであり人間の内から生じるものは悪いとする。ここに Lawrence のキリスト教批判が伺える。

Lilly にはパン神との共通性がある。彼は糸杉がまとう “demon” の特質を持つ。

Great life-realities gone into the darkness. But the cypresses commemorate. In the afternoon, Aaron felt the cypresses rising dark about him, like so many visitants from an old, lost, lost subtle world, where men had the wonder of demons about them, the aura of demons, such as little clings to the cypresses, in Tuscany.<sup>55)</sup>

Aaron thought of Lilly's dark, ugly face, which had something that lurked in it as a creature under leaves.<sup>56)</sup>

Lilly の言葉は Aaron には言葉というよりは「音楽」に聞こえる。言葉はパンの死と関連している。偽善的な言葉が「ぶよの群」とたとえられる不協和音に満ちたキリスト教社会を脱し、パン神の笛が響く古代異教世界への志向が *Aaron's Rod* には存在する。Lilly の姿は Aaron にはビザンチンのイーコンのように映るとも書かれ、Lawrence はどの異教世界とも限定していない。

マタイ伝、マルコ伝において十字架刑に処せられたキリストはイバラの冠をつけられ、葦の棒 (staff) で打たれた。聖書では葦の棒は “staff” と書かれているのみだが、葦としてのフルートはイバラを生じた。キリストが同胞から拒絶されたように、イバラのあるフルートが壊れたことは Aaron が同胞と決定的に分断されたことを意味していると考えられる。

そして通説ではキリストは32~33歳で死んだと思われている。Aaronが蒸発したのは32歳で約一年経って彼は“singleness”の卵となった。Aaron's Rodのテーマにはキリストが*The Escaped Cock*で異教世界へ甦るテーマの暗示があることが多くの異教的シンボリズムより伺える。Lilyの意味深長な言葉により、このテーマを締めくくろう。

... -and I'm sorry for any Christus who brings him to life again, to stink livingly for another thirty years: the beastly Lazarus of our idealism.<sup>57)</sup>

#### 注

\*本稿は1991年5月に開催された日本ロレンス協会大会において口頭発表したものに加筆補足したものである。

- 1) D. H. Lawrence, *The Collected Letters* (Cambridge U. P., 1991) vol. IV., pp. 92-93.
- 2) D. H. Lawrence, *Women in Love* (Cambridge U. P., 1987) p. 148.
- 3) D. H. Lawrence, *Aaron's Rod* (Cambridge U. P., 1988) pp. 280-81.
- 4) *Ibid.*, p. 25.
- 5) *Ibid.*, p. 158.
- 6) *Ibid.*, p. 161.
- 7) *Ibid.*, p. 125.
- 8) D. H. Lawrence, *St. Mawr and Other Stories* (Cambridge U. P., 1983) p. 161.
- 9) *Ibid.*, p. 161.
- 10) *Aaron's Rod* p. 7.
- 11) *Ibid.*, p. 6.
- 12) *Ibid.*, p. 6.
- 13) *Ibid.*, p. 5.
- 14) *Nation and Athenaeum* (12 August, 1922), p. 655. Quoted in R. P. Draper, ed. *D. H. Lawrence: The Critical Heritage* (London, 1970), p. 178.
- 15) *Aaron's Rod*, p. 11.

- 16) *Ibid.*, p. 23.
- 17) *Ibid.*, p. 22.
- 18) *Ibid.*, p. 23.
- 19) *Ibid.*, p. 45.
- 20) *Ibid.*, p. 32.
- 21) *Ibid.*, p. 32.
- 22) *Ibid.*, p. 80.
- 23) *Ibid.*, p. 58.
- 24) *Ibid.*, p. 23.
- 25) *Ibid.*, p. 93.
- 26) *Ibid.*, p. 97.
- 27) *Ibid.*, p. 91.
- 28) *Ibid.*, p. 91.
- 29) *Ibid.*, p. 128.
- 30) *Ibid.*, p. 128.
- 31) *Ibid.*, p. 119.
- 32) *Ibid.*, p. 119.
- 33) *Ibid.*, p. 119.
- 34) *Ibid.*, p. 119.
- 35) *Ibid.*, p. 164.
- 36) *Ibid.*, p. 164.
- 37) *Ibid.*, p. 165.
- 38) *Ibid.*, p. 165.
- 39) *Ibid.*, p. 166.
- 40) *Ibid.*, p. 167.
- 41) *Ibid.*, p. 258.
- 42) *Ibid.*, p. 258.
- 43) *Ibid.*, p. 148.
- 44) *Ibid.*, p. 148.
- 45) *Ibid.*, p. 150.
- 46) *Ibid.*, p. 153.
- 47) *Ibid.*, p. 153.
- 48) *Ibid.*, p. 234.
- 49) *The Critical Heritage*, p. 178.
- 50) *Aaron's Rod*, p. 15.

- 51) *Ibid.*, p. 13.
- 52) *Ibid.*, p. 13.
- 53) *Ibid.*, p. 280.
- 54) *Ibid.*, p. 295.
- 55) *Ibid.*, p. 265.
- 56) *Ibid.*, p. 289.
- 57) *Ibid.*, p. 281.